

平成28年度

共育型地域インターンシップ in 田舎館
記録集

1. はじめに
2. インターンシップでの活動の概要
3. 田舎館村マニア増加計画（田舎館村への提案1）
4. 民泊の良さを伝える草の根運動（田舎館村への提案2）
5. 田舎館を流行に（田舎館村への提案3）
6. 学生の学びー地域社会のリーダーへの道ー
7. 田舎館村への影響ーおわりにかえてー

インターンシップ生

伊東遥（弘前大学人文学部現代社会課程社会行動コース）
八島愛美（弘前大学人文学部現代社会課程社会行動コース）
小松裕理香（弘前大学人文学部現代社会課程社会行動コース）

田舎館村担当

福士勝（田舎館村役場企画観光課長）
工藤康人（田舎館村役場企画観光課企画係長）
館山一晃（田舎館村役場企画観光課企画係）
阿保和紀（田舎館村役場企画観光課企画係）

弘前大学メンター

工藤裕介（弘前大学COC推進室）
小寺将太（弘前大学COC推進室）

記録集編纂

西村君平（弘前大学COC推進室）

1. はじめに

田舎館村で行った共育型地域インターンシップの活動の記録です。以下、本稿では共育型地域インターンシップの特徴や活動内容、その効果を整理していきます。実際の活動内容に入る前に、ここでは、まず「そもそも共育型地域インターンシップとは何か」確認しておきましょう。

(1) COC+事業の概要

現在、日本のいたるところでCOC+という言葉が飛び交っています。COC+とは「地（知）の拠点（center of community）大学による地方創生推進事業」の略称で、学生を地元に着させようとする大学に対して助成を行う政策です。弘前大学は、平成27年度からCOC+に採択されています。

弘前大学は、青森県内の9の高等教育機関、5つの自治体、100を超える企業と連携して「オール青森で取り組む地域創生人財育成・定着事業」を進めています。その主要な取組の一つが、共育型インターンシップです。

(2) 学生主体ー共育型地域インターンシップの特徴ー

従来のインターンシップは、学生と企業のマッチングを目的としており、短期間の職場体験・社会見学といった内容がメインでした。インターンシップを通してミスマッチを解消することは、学生や企業にとっては小さくないメリットではあります。ただし、学生や企業の成長につながるものではありませんでした。

これに対して、共育型インターンシップでは、学生と企業、双方の成長が目指されます。活動内容は、通常業務の補助のような比較的従来型に近いものから、学生に新規事業の立ち上げや営業販路拡大を担当させるような驚くべきものまで、多種多様です。

	従来型		共育型			
タイプ	仕事理解型	採用直結型	業務補助型	課題協働型	事業参画型	学生主体型
特徴	職場や業界に関する理解の醸成	採用ミスマッチの解消	通常業務を責任を持って担当	組織の課題に関する調査や提言	実際のプロジェクトへの参画	ゼロから実践を組み立てる
活動	短期間の職場体験		中長期的な職業実践			学生の試行錯誤 仮説生成から 仮説検証まで
学生のメリット	社会を知る		社会人基礎力			社会人基礎力 主体的探求力
組織のメリット	学生を知る		学生を活用した業務の推進	学生の発想を生かした組織改革	学生を活用した新規事業の推進	未知への挑戦 新機軸の構築
社会的な意義	大学から社会への円滑な移行		企業や業界の将来を担う若者の育成			地域社会の リーダーの育成

インターンシップの分類および本インターンシップの位置付け

では、数ある共育型インターンシップと比して、田舎館村で行った共育型地域インターンシップにはどのような特徴があるのでしょうか。目につく特徴は、受入機関が企業ではなく自治体・地域社会であるという点です。そして「受入機関が自治体・地域社会である」ということに起因して、更なる特徴が生み出されます。それは「学生主体の試行錯誤を重視する」という特徴です。

地域社会は特定の目的を達成するために組み立てられた組織体ではありません。自然に形成された共同体です。それゆえに地域社会や自治体の活動の場合、少数の明確な目的を設定するなどということは困難です。拙速にそんなことをしてしまうと、「目的の明確化」という名の単なる言葉遊びに終始してしまい、実際の活動とかけ離れた有名無実の目的が生み出されてしまうことになってしまいます。

地域社会の住民や自治体の職員が送る「答えどころか問いすらもなかなか見えてこないような試行錯誤の日々」。この過程を業務補助や課題協働、事業参画のインターンシップに組み込むことは困難です。むしろ必要なことは、学生の力を信じ、地域社会・自治体・大学がともに試行錯誤を行っていくことです。その中で学生だけでなく、地域社会や自治体のみなさまも（そして大学も）新しい学びを得ることになると期待されるからです。

（３）学生の学び・地域の学び

共育型地域インターンシップにおいて、学生はゼロから実践を組み立てるという途方も無い挑戦に取り組めます。与えられた課題をこなすのではなく、地域社会に深く根を下ろし、自ら仮説を立て、その仮説を検証していく。このプロセスを通して、学生たちは責任ある自立した社会人としての振る舞いを身に着けるとともに、主体的探究力を育みます。

学生の試行錯誤は、その未熟さやゆえに奔放です。学生に付き合っていくうちに、地域社会や自治体の皆様は、気がつくや未知への挑戦に片足を突っ込んでいるはずです。そしてその結果として、今まで思いもよらなかったようなアイデアや新しい考え方が形成されます。新しいアイデアや考え方は、時間をかけて地域社会や自治体に浸透し、徐々に地域社会・自治体に新機軸の構築へとつながっていくと期待されます。

（４）悪戦苦闘を讃える

「学生主体」という言葉には美しい響きがありますが、当人にとっては、泥の中を進んでいくような、苦しく辛い経験になります。実際、田舎館村でのインターンシップに参加した学生たちは、かなりタフな毎日を送っていたようです。しかし、この悪戦苦闘こそが、学生のそして地域の学びには欠かせないものだとの確信しています。

2. インターンシップでの活動の概要

田舎館村インターンシップは平成28年5月29日から12月2日に実施されました。この間、学生は週に1から2回程度の頻度で田舎館村にいき、また折々に、学内でディスカッションを行いました。

学生の活動は、内容の変化に応じて、大きく3つの時期に整理できます。「田舎館を知る期間」、「とことん活動期間」、「企画実践期間」です。インターンシップの山場は、「企画実践期間」です。しかし、その前段階として、田舎館村にしっかりと根を下ろす「田舎館を知る期間」や試行錯誤のスタートを切る「とことん活動期間」も極めて重要な時期です。

田舎館を知る期間

5/29 田んぼアート田植え
6/10 いちご農家訪問
6/11 高経との交流①
6/19 田舎館ぷらっとデー
7/16 ねふた制作
7/24 どろリンピック

とことん活動期間

8/7 高経との交流②
8/9 お米ツアーテスト
9/25 地方創生大臣訪問
10/1 高経との交流③
10/2 田んぼアート稲刈り

企画実践期間

10/7 お米ツアー本番
10/8 子ども交流
10/24 農業体験
11/18 農家民泊体験

(1) 田舎館を知る期間



初めての田舎館、初めての田植え (5/29)

これからどんな活動ができるか、楽しみな反面、不安もあった。



いちご農家訪問（6/10）

田舎館には、農家訪問に応じてくれるいちご農家も。

いちご農園が身近にあることは、村民にとっても、観光資源としても貴重。



高崎経済大学交流会(6/11、8/7、10/1)

田植え、稲刈り、ワークショップ。高崎経済大学の学生と共に田舎館について学ぶ機会を得る。

全く違う土地の学生との交流は大きな刺激に。



田舎館ぶらっとデー (6/19)

村内をぶらっとお散歩。農作業中の方とお話したり、グラウンドゴルフの練習に交ぜてもらおう。
田舎館の日常、雰囲気を感じてもらう。



ねぶた制作 (7/16)

実際に運行するねぶたを制作

どろリンピック (7/24)



(2) とことん活動期間



お米ツアー
(テスト8/9)

八島による新規事業提案
今まで見てきたものをカタチ
にして発信。

地方創生大臣訪問 (9/25)
自分たちの活動を広く発信する機会に



田んぼアート稲刈り
(10/2)

なれない手つきで、初めての
稲刈り体験。

子ども交流会（10/8）

伊東企画。人々の田舎館村への愛着を育む手立てを模索



農業体験（10/24）

田んぼアートの最終稲刈り。農業の楽しさを感じる場面。



農家民泊体験（11/18）

農家民泊を体験。一緒に汗を流したり、ご飯を作ったり。



3. 田舎館村マニア増加計画（田舎館村への提案1）

（1）どろリンピックで生まれた仮説

数あるインターンシップでの活動の中で、一番印象的なイベントはどろリンピックです。どろリンピックとは泥の上でつなひきや徒競走など様々な競技をする運動会のようなもの、競技後はみんなで食事するというイベントです。

実際に参加してみて、どろリンピックは、田んぼに囲まれた田舎館村でしか体験できないイベントだと感じました。また、大人から子どもまで参加していて、全身でどろを楽しんでいるような雰囲気が印象的でした。

その一方で、家族や友達同士での会話はみられたが、村民と会話をしている様子がいまみられなかった点が気になりました。田舎館村には様々なイベントがあります。しかし、イベントにおいて、参加者はもともと知り合いとのみに交流し、村民と交流する時間は少ないように思われました。

このような観点から、私は「イベントではじめて出会ったような人とも会話し交流することで、参加者が田舎館村の様々な魅力を知り、それが田舎館を好きになることへとつながるという仮説を立てました。

どろリンピックで生まれた仮説

- ・田んぼに囲まれた田舎館村でしか体験できないことを知った
- ・大人も子どもも関係なく「どろ」を楽しんでいた



仮説：
村民と**交流**する時間が少ない？



交流を重視した企画を実践してみたい！
もっと田舎館の魅力に触れられるはず

（2）子ども交流企画

上記の仮説に基づいて、参加者が会話し交流することを重視した企画を実施してみたいと思いました。それにより田舎館村の魅力にもっと触れられるはずです。

それまで子どもとのかかわりが少なかったことも踏まえて子どもと交流するイベントを企画しました。イベントには田舎館村中央児童館で行わせていただき、嬉しいことに小学生が22人も参加してくれました。

ただお話しする機会としての交流会ではなく、子どもたちに楽しんでもらうために、児童館の見学に行った際に子どもたちが一番楽しんでいるように感じた運動という要素も盛り込みました。

具体的には、リレーの最中に、将来の夢や田舎館村の好きなところを書く「お絵かきリレー」と田舎館村のイメージキャラクターである米こめくんをチーム全員で協力し想像で書いてみるエクササイズを行いました。

お絵かきリレーの「田舎館村の好きなところを書く」という部分には、子どもたちが田舎館に愛着をもつきっかけになってほしいという狙いがありました。実際にやってみると、この活動は、子どもたちから見た田舎館のよさを掘り起こすことにもつながりました。実際に、子どもたちが好きなものとして、田んぼアートや役場の建物なども比較的想定の範囲内の回答もありましたが、ねぶたや米こめクン、児童館などがあがりました。



お絵かきリレー



みんなで米こめくん

企画を通じて、みんなが田舎館村で交流すれば、一人では気づけない田舎館の隠れた魅力にも気づくことができるということを再確認することができました。イベントではじめて出会ったような人とも会話し交流することで、参加者が田舎館村の様々な魅力を知り、それが田舎館を好きになることへとつながるという仮説は、やはり妥当なものなのではないかという手応えを得ました。

（３）交流を生み出そう！交流を育てよう！

この経験を踏まえて、田舎館マニアを増やすための２つのアクションを提案します。１つめは食事時間の活用です。食事時間に「村民×参加者」の交流を行います。これによって、参加者に田舎館村のことを知ってもらい、もっと好きになってもらいます。具体的には、地域団体単位で、イベント参加者のグループに混ざって、そこで共に食事するという活動を行ってはいかがでしょうか。これに加えて、更に「村民×村民」での交流もお越し、村民同士で田舎館の魅力を掘り起こしたり、再確認することも意義のあることだと思います。

２つめは「年間イベントスタンプラリー」です。スタンプラリーでイベント同士をつなぎ、１つのイベントで生まれた交流をほかのイベントでの交流につなげていきます。（リピーター・お得意様の確保。）これによって、今までになかったような長いスパンの交流が生まれることが期待されます。



提案：年間イベントスタンプラリー



スタンプラリー該当候補イベントの数々

「交流」をキーワードに田舎館村の魅力を総合プロデュース

私自身、これまでの活動を通して田舎館村の人のあたたかさに触れ、田舎館マニアになることができました。「交流」をキーワードにした取組で、私と同じように、「田舎館マニア」が増えていく可能性は低くありません。

4. 民泊の良さを伝える草の根運動（田舎館村への提案2）

（1）民泊の「楽しみ」再考

私は実際に「田澤とまと」さんの所で一泊二日の農家民泊を体験しました。今回の経験は、私にとって初めての農家民泊でした。使ったことのない作業道具を使ったり、初めての農作業体験に驚きと感動がありました。また田澤さんのご家族の皆さんとご飯を作ったり、たまいないおしゃべりなどして楽しい時間を過ごすことができました。

民泊で私がもっとも楽しかった時間

時間帯	内容
11:30～12:00	紐取り（トマトのツル固定用）
12:20～12:50	お昼ご飯
13:15～16:50	紐取り
最高	枯れツルの片づけ
	ビニールハウスの網をまく
	支柱の片づけ
17:00～17:30	休憩
17:30～18:50	夜ご飯準備
18:50～19:30	夜ご飯
19:40～21:30	おしゃべり
	お風呂
	就寝
7:15～7:40	朝ご飯
	準備
8:00～8:15	ラベル貼り
8:30	解散

は農業体験です。農業というときつい仕事というイメージがあります。しかし、私にとっての農業体験は、「のどかな風景の中で、しかもおいしいご飯の後で、自分の体を動かして普段体験できない仕事をする」という楽しさを持っていました。この経験を通して、見る楽しさとは違う、体験する楽しさが民泊にはあると感じました。

農業体験の魅力

農業 ≠ きつい仕事

- のどかな風景の中で
- 美味しいご飯のあとで
- 自分の体を動かして
- 普段体験できない仕事をする楽しさ

「見る楽しさ」とは違う、
「**体験する楽しさ**」が民泊にはある

（２）認知度という課題

民泊には課題もあります。それは民泊の認知度の低さです。田舎館には民泊の運営組織がありません。また民泊を始めようとする人も多くありません。中には、民泊を無給のボランティアと誤解しているケースや他人を家に泊めることに抵抗があるケースもあるようです。

（３）草の根運動の展開

そこで私は民泊の良さを伝える草の根運動を提案します。主に２つの運動を考えています。１つめの運動は農家民泊交流会です。通常の民泊はホストファミリーと宿泊者の交流ですが、私が提案する民泊交流会では、ホストファミリーと宿泊者の交流に民泊に関心のある農家さんも交流に参加します。これは農家民泊の実情を知るチャンスです。また、魅力に気付いてモチベーションアップ、農家民泊の機運上昇につながります。

２つめの運動は農家民泊の広報誌でのPRです。農家さんだけでなく、田舎館の人々に民泊を知ってもらいたいです。そして思わず、民泊したくなるような魅力的な情報を発信することです。インターンシップでの活動を通して、もっとたくさんの人に田舎館村の農業を知ってもらいたいと思いました。この自慢できる田舎館村の農業を民泊を通して広めていくのはどうでしょうか。

開始時間	内容
11:00～	対面式
12:00～12:30	お昼ご飯
13:00～17:30	農業体験 休憩
17:30～19:00	夜ご飯準備
19:00～20:00	夜ご飯 田舎館や津軽の郷土料理
20:00～	おしゃべり お風呂 就寝
7:00～7:30	朝ご飯
9:00～11:00	農業体験 解散 田舎館観光

農家民泊交流会モデルスケジュール



みんなで汗を流そう！

5. 田舎館を流行に(田舎館村への提案3)

(1) 田舎館村にとっての「お米」の位置づけ

田舎館村にはたくさんの地域資源があります。田舎館城跡に茂るサイカチの木、刀づくりの刀匠、遊稻の館にあるお茶碗のモニュメント、立派な鳥居の神社、十一面観音像、田舎館いちごなど。半年間の活動を通して、このほかにもまだまだあって紹介しきれないほどたくさん地域資源を見つけてきました。

それでもやっぱり田舎館といえばお米だと思います！村民憲章に田んぼの「田」がはいつているように、お米は田舎館のシンボルです。年間34万人が訪れる田んぼアートや、弥生時代の稲作が証明された垂柳遺跡などは、特に誇るべき地域資源です。

田舎館のシンボルであるお米を知ること、お米を通して田舎館の様々な横顔を知ることができる。このような観点から、お米ツアーを企画・運営しました。

(2) お米ツアーの企画・運営

私は、田んぼアートを観るためだけに田舎館を訪れるのはもったいないと思います。さきほど紹介したような様々な観光資源が田舎館にはあるからです。

田んぼアート製作に関わる人やその製作にかける思い・努力、村の稲作の歴史、お米を使った料理などを通して、参加者に田舎館のお米のすべてを知ってもらいたい。これがお米ツアーの狙いです。

私自身が学生ツアーガイド役を務める形で、2度お米ツアーを実施しました。ツアーへの参加者は、弘前大学生の参加がほとんどでした。内容としては、田舎館を、五感を使ってとことん楽しめるようなツアーを目指しました。

ツアーは6つの行程に分かれています。1つめはお米を「見る」ということで、田んぼアートを展望デッキから鑑賞します。この際には、学生ガイドとしてインターン中に学んだ、田んぼアートに関する知識を参加者に伝えました。2つめはお米を「知る」ということで、埋蔵文化財センターの見学をします。村の歴史に参加者は興味津々でした。

お米を「見る」

展望デッキから田んぼアートを鑑賞



お米を「知る」

埋蔵文化財センターで稲作の歴史を学ぶ



ここからの行程は、「田園」未来を築く会のご協力のもと、遊稲の館で行いました。3つめの行程はお米に「触れる」ということで、乾燥させた稲を使いオリジナルのリースを作ります。4つめのお米を「味わう」では、三種類の古代米を練り込んだ三色うどんと紫黒米のおにぎりをいただきます。

お米に「触れる」

古代米の稲でリース作り



お米を「味わう」

昼食に古代米を使用したうどんをいただく



5つめの、お米を「作る」では、古代米を使っておはぎ作りをします。参加者は、遊稲の館でしか食べられない、お米とあんこが逆のおはぎ作りに苦戦しながらも楽しそうに作っていました。最後はお米を「語る」です。囲炉裏端で作ったおはぎとお抹茶を頂きながら、村の人々とお米についておしゃべりをします。田んぼアートの裏話や田舎館の歴史について聞くことができます。

お米で「作る」

古代米でおはぎ作り



お米を「語らう」

地元の方々と楽しくお米についておしゃべり



(3) お米ツアー前後での田舎館への印象の変化

学生にこのツアーを行う前の田舎館村の印象を聞いてみたところ、こんな声がありました。「田舎館には行ったことがない」「村名から究極の田舎というイメージ」「黒石行く途中に通るところ」「田んぼの風景」「田んぼアートしか分からない」「田んぼの絵はペンキで描いてると思ってた」。田舎館村にとっては厳しい声です。

しかし、このお米ツアーを実施し、参加者にアンケート、直接お話を聞いたところ「心もお腹もお米でいっぱい」「田んぼアートしかないと思ってたけど、他にも良いところがたくさんあった」「田舎館を好きになった」「北海道の両親を連れてきたい」「田んぼアートの見方が変わった」という感想が得られました。

私が一番強調したいのは、ツアーを終えた時点で、全員が「また田舎館に来たい」と言っていた点です。

(4) 田舎館流行化へのロードマップ

お米ツアーの企画・運営を通して、弘前大学生の間で田舎館観光を流行させるという展望を得ました。実際にツアーを行って気づいたのですが、お米ツアーは、学生が参加しやすい、楽しいと思ってもらえるツアーであり田舎館の魅力を伝えやすいものです。ツアーという方法で、田舎館のお隣、弘前市から学生を連れてきて、学生の思い出をさらに豊かにすれば、お米ツアーは学生にとっても田舎館にとっても大きな意味を持つのではないのでしょうか。

学生の中の流行には、波及効果が期待されます。お米ツアーで学生が田舎館に来てくれれば、在学中には、恋人や友人と連れ立って再訪してくれる可能性は高まります。例えば黒石インターチェンジを使う時に、田舎館の道の駅などにもふらっと寄ってくれるかもしれません。

さらに、卒業してからも青森県を出てもリピーターとなってまた訪れてくれるはずです。そして、その時には家族や友人なども連れ立ってきてくるでしょう。その家族や友人の輪がさらに広がりを持って、老若男女たくさんの人に田舎館に一度来てもらえることが期待されます。

私の考えたお米ツアー。是非とも来年、再来年と継続してほしいと願っています。

学生ブームに期待される波及効果

お米ツアーで学生が田舎館に

友人や恋人を連れ立って再訪

卒業後に家族や知人を連れて

さらなる広がりを持って

老若男女たくさんの人に田舎館に一度来てもらえるのでは？！

6. 学生の学びー地域社会のリーダーへの道ー

(1) リフレクション

田舎館村での全ての活動を終えた後に、弘前大学にてインターンシップでの活動を通して何を学び、どこが成長したのかを考察する「リフレクション」を行いました。リフレクションの目的は活動の意味を明確化することです。これは田舎館村での様々な活動を単なる思い出に留めず、インターンシップ生と田舎館村の未来への糧とするために、欠かすことのできない過程です。

リフレクションにあたっては「地域志向人財ループリック」を活用しました。地域志向人財ループリックは、弘前大学COC+の教育理念である「地域社会のリーダー」に求められる力を表の形で整理したものです。ループリックは田舎館村でのインターンシップを通して、自分にどのような力が身についたのか、考えるヒントになります。

地域志向人財ループリック

育成する人財像	基準	尺度				
		実践・貢献	成熟化・省察化	主体化・内面化	初歩・入門	無関心
		4	3	2	1	0
グローバルマインドを持ち、地域に対する愛着、地域の創造を目指す意欲をもった人財	1 グローバルマインド	異なる価値観をもつ人と積極的に関わり、共生・協働できる	異なる価値観を持つ人を尊重し、その価値観を受け入れることができる	異なる価値観を理解することはできる	異なる価値観をもつ人がいることを知っている	異なる価値観をもつ人がいることを知らない
	2 地域志向（愛着・コミットメント）	多角的な地域理解に基づき、自覚的に地域に根を下ろして活動している	地域について多角的な知識を有し、その実態を複眼的に理解している	地域の歴史や文化、経済等を自ら学んでいる	地域について初歩的なことを知っている	地域に関心がない
	3 創造を目指す意欲	既存の枠組みにとらわれず、多種多様なアイデアを出すことができる	独創性を感じさせるような質の高いアイデアを出すことができる	普段から積極的にアイデアを出そうと努力している	現状を多少改善するような簡単なアイデアを出すことができる	現状に満足し、創造を目指すとうしない
複雑化する地域課題に文理の枠を超えて総合的にアプローチできる文理融合型の人財	4 文理の基礎的な教養	文理を問わず、幅広い分野の基礎知識を体系的に学修している	文理を問わず、幅広い分野に興味を持ち、学修している	幅広い分野について学修している	自分の関心に従い、幾つかの分野の学修を始めている	知識を求めない
	5 他領域の専門家との協働	自分と異なる領域の知識や技能、考え方を理解して尊重し、柔軟に協働できる	はっきりした役割分担のもとで、他領域の人と一緒に活動することができる	異なる領域の専門家と関わることができる	自らの専門領域の中では、他者と協働できる	他者と協働できない
	6 複雑な課題にアプローチする力（課題解決能力）	自らの知識やスキルを活かして、複雑な課題を多角的に分析できる	自らの知識やスキルを活かして、複雑な課題を分析できる	教員等の支援のもとで、複雑な課題を分析できる	単純な課題を分析できる	課題をどのように分析して良いのかわからない
獲得した専門知を活用して地域の課題解決を主導できる人財	7 専門的な知識・技能	専門知を体系的に理解し、その発展に貢献できる	専門知を体系的に理解している	個々の専門知を自分の中で有機的に関連づけて理解している	入門的な専門知を断片的に有している	専門知を有していない
	8 地域課題へ専門知を活用する力	体系的な専門知を活用し、実効性のある地域課題分析と解決策提案を行える	体系的な専門知を用いて、地域課題の分析と解決策の提案を行える	幾つかの専門知を用いて、地域課題を分析できる	入門的な専門知を用いて、地域課題を自分なりに解釈できる	専門知を活用できない
	9 リーダーの役割	目標の実現に向けてチームを組織し、メンバーを動かすことができる	チームの個々人と関わるることができる	リーダーとしてやるべきことを知っている	リーダーの漠然としたイメージを持っている	リーダーの役割が全くわからない

(2) 身についた力

伊東遥：創造的な経験をきっかけとしたリーダーシップの成長

自分がゼロから企画した内容のイベントに参加者に楽しんでもらえることができれば、自分にとっても励みになるし、もっと参加者のためにおもしろいことを考えようという気持ちになります。田舎館村でのインターンシップの一環として、私は「子ども交流会」企画運営し、このことに気づきました。

インターンシップの活動の中でどろリンピックに参加して、家族同士の会話や友人同士の会話ばかりが目につき、村民と関わったり会話したりする機会が少ないように感じました。加えて、それまでの活動全体を通して子どもと関わる時間も少ないと思ったこともあり、子どもを対象にした企画を実践してみようと決心しました。

企画に際しては、子どもたちに楽しんでもらえて、かつ学ぶことができるような今までにないものを企画してみたいという思いがありました。そこで交流会の内容として、「お絵かきリレー」という競技を発案しました。具体的には、リレー中に将来の夢と田舎館村の好きなところを書くというという競技と、仲間と協力しつつ田舎館村について知るという狙いも込めて「米こめくん」を書くという競技です。

子どもたちは皆、楽しそうに競技に参加してくれました。子どもたちの楽しんでいる様子を見ることができたことがわたしにとっての財産になりました。交流会をきっかけに、今まで苦手でやる勇気も出なかったリーダーという役割にも積極的になったように思います。1人で企画し実践するという経験が、自分にとって大きな自信となり、リーダーをやってみようという勇気につながりました。実際、インターンシップと並行して「大学生観光まちづくりコンテスト」にリーダーとして挑戦しました。仲間を集めるところから始め、コンテストに向けて活動しポスターセッション優秀賞をいただくことができました。

一定の成果が出たとは言え、仲間の力に頼りすぎてしまったという反省点もあります。今後はただ単にリーダーの役割を務めることに満足するのではなく、チームをうまくまとめあげることができるようなリーダーとして活動していけるようになりたいです。

小松裕理香：異分野の人々とコミュニケーションする力

インターンシップを通して、私は「民泊」という必ずしも自分の専門分野とは言えないようなテーマに関心を持ち、民泊実現に取り組むこととなりました。この過程で、様々な立場の人とコミュニケーションをとり、たくさんの人と協働して活動していく力がついたように思います。

田舎館の生活体験プログラムに向けてまず民泊とはこういったものなのか調べる必要がありました。その中で、農学生命科学部でグリーンツーリズムについて研究している藤崎先生にグリーンツーリズムや民泊について話を聞く機会を得ました。そこでは、事例として民泊を行っている団体を教えてもらったり、田舎館での民泊の始め方、私が生活体験プ

プログラムを進めていく上でのヒントをもらったりと、民泊を始めるための土台となる知識をたくさん得ることができました。

そうして得た知識を現実のものにするために、田舎館村での活動に戻ってからも、役場の方や田舎館村の農家さんとお話をしたり、実際に農業体験もさせてもらったりと色々な方と関わりながら事業化に取り組んでいきました。

インターンシップに参加したからこそ民泊という知識を得ることができました。さらには、民泊をキーワードに、たくさんの方と一緒に生活体験プログラムに向けて活動していくことができました。この経験を通して、私には異分野の人々とコミュニケーションをとっていく力がついてきたと思います。

八島愛美：創造力

私は、田舎館インターンシップに参加する前は、新しいことに取り組むことや、おもしろいことに挑戦することに少し抵抗があり、「自分で一からやるのが面倒」「失敗したら怖い」と思っていました。しかし、田舎館インターンシップに参加し、お米ツアーという観光ツアーを自分で企画・運営したことにより、その感覚がなくなりました。

ツアーの企画書を担当の方に見せるときには「これでいいのかな」「実現可能なのか」と不安でいっぱいでした。でも、私の提案に、周りの人が賛同してくれて「これやってみよう！」となった時にはとても嬉しくやる気ができました。企画を進めていく中で、協力してくれる団体さんと打ち合わせをして内容を固めたり、住民の方にアポを取ったり、告知をしたりなど、様々な経験をしました。企画を進めていくのはとても大変で反省すべき点多々ありますが、自分でもなんとか企画をかたちにすることができて自信になりました。

実際にお客さんを招いてのツアーをやるときはとても緊張しました。自分がガイドとして説明するところや、進行などを失敗したら、楽しんでもらえなかったらどうしようととても不安でした。しかし、やってみると自分自身楽しんでできましたし、参加者からも満足のいく感想をもらえたので、この企画を頑張っって本当に良かったと感じました。

しかし、「今まで田舎館で見て知ったことを集めてかたちにし、発信する」という目的だったので、独創性という面では、今回の私の企画は少し欠けていると思います。もとからそこにある物を活かすという方向性ではありましたが、そのなかでも、おもしろさを追求していろいろ工夫したところが、参加者の印象に残っていたようなので良かったです。

田舎館インターンシップを通して、何か新しいことを一生懸命やってみる、そしてそれができた時の達成感と楽しさと、喜びを感じる事ができました。

(3) メンターからの講評

工藤：

田舎館村で自分は何を行うのか、それを見出すこと、そしてどのように実行するのか、大きくはこの2つに学生は悩んだように思えました。地域を知る（あるいは自分なりに分析した）ところから、実行に向けて進んでいくにはある種の飛躍が必要だと言えます。

八島愛美さんは、歴史好きから飛躍しお米ツアーにたどり着きました。しかし、そこに辿り着く・気づくまでの苦悩、特に実行していくための企画への落とし込み・関係者との調整など初めてのことに苦戦していました。それを乗り越えて、「お米ツアー」という田舎館の特徴を活かした企画を立案・実施できたことは、大きな自信につながったように見えます。

伊東遥さんと小松裕理香さんは、田舎館村を知る期間・とことん活動期間から、実践へ飛躍するまでにとっても時間を要したと思います。その時間によって、自分自身が何をしたいのか、何が好きなのか、何に興味があるのか等を見つめ直すことができたと考えています。

伊東さんの「子ども交流」企画は、自身の子ども好きから生まれたものです。自分自身を見つめることをとおして、何を行うのか、どのように行うのかに多くの時間をかけたことは、企画を立案・実行できたことに加えて、自分の将来を考える参考にしてほしいとも思っています。

小松さんの「農家民泊体験」は、自身の実家が農業を行っていること、農業に興味を持っていることだけから生まれたものではないでしょう。インターンシップのプロジェクト自体に組み込まれていたと活動とは言え、弘前大学の教員や地域住民との関わりから、自分自身が取り組みたいと思い、実践に向けた飛躍ができたのではないかと感じています。

多くの人とのかかわりが、自分自身を助け、自分を見つめ直すきっかけになったと実感できたのではないのでしょうか。

小寺：

地域を良くしたい、盛り上げたいという一心で活動してきた3名の学生はインターンシップ中、大きな成長を遂げていきました。実際に、地域で活動していくには、まずその地域を知ること、次に計画を練る、そこから実践していくという流れが重要です。3名の学生は地域に深く入り込み、それぞれ自分のやりたいことと地域が求めることをしっかりと照らし合わせながら実践していきました。

地域で活動することは、楽しさややりがいがある一方で、様々な困難や苦難という壁にぶつかります。その壁をいかに乗り越えるか、様々な悪戦苦闘を経験しながら実践へと移行し、3名とも大きく成長していきました。

八島愛美さんは、田舎館村の観光に着目し五感を使って学べる「お米ツアー」を企画し、実行しました。この企画は、八島さんがしっかりと地域を知る期間で地域の人と信頼関係を構築したことによって企画できたツアーです。初めての企画であったことから、関係者との調整や集客などに悪戦苦闘していましたが、それらを地域の人との仲間力や行動力で乗り越えていきました。この企画を通して、学んだことを今後の将来のキャリアにつなげてもらえるととても嬉しいです。

伊東遥さんは地域のこどもを巻き込んだイベントを企画しました。伊藤さんは自分が地域でやってみたいことと地域が求めていることをしっかりと把握し、企画を練っていました。八島さんと同様、調整などに苦戦していましたが、1人ですべて企画し乗り越えたことで、行動力のみならず、リーダー性も大きく身に付いていきました。今後の活動やキャリアに大きくつながっていくと信じています。

小松裕理香さんは、民泊の良さを伝えたい、農業の楽しさを広めたいと強い思いをもって様々な農業に関する取り組みを行ってきました。地域を深く知る活動をたくさん行ったことによって、地域の人々との信頼関係を構築し、巻き込んでいきました。地域にしっかりと足をつけて活動してきたことによって、民泊体験にたどり着くことが出来ました。地域と信頼関係を築くのは、長い年月がかかるものです。今回の経験を通して、3年生、4年生になってもたくさんの地域で活躍していけると考えます。

このように3名とも企画から実践を通し、地域で大きく成長していきました。これから自分の好きなことや行いたい活動をしっかりと見つけ、大きく成長していくことを願い、信じています。

7. 田舎館村への影響－おわりにかえて－

インターシップ受入機関：田舎館村役場より

学生が長期間にわたって地域で活動を行ったこのインターンシップは、これまで村が受け入れてきた、役場業務の一端を体験していただくような就業体験とは全く異なるものであり、学生は役場庁舎ではなく村全体をフィールドとして活動し、大きなイベントから地域住民の日常生活、地域産業などを調査、体験していました。自身の名刺を携え、村を巡った様子をSNSで発信しながら、学生は自主企画を実施し、効果検証を行って地域を活性化させる提案へ繋ぎました。

その過程で行われた地域住民や関係団体等とのアポイント、打ち合わせでは、受け入れ側の役場としても、これまで関わりが少なかった方々と関わりを持つことができ、さらに、学生が感じたことを「第三者の声」として地域に伝えることができました。

当初、このインターンシップのミッション設定のため地域住民や関係団体とのワークショップが行われた際、地域の魅力とは何かを再考する場面に村職員として立ち会いましたが、参加者は常日頃から村を見続けていることもあり、既に携わっている方々が、既存のものから新しい可能性を見出すことは難しいように思えました。

小学校のいちご狩り体験学習に同行していちご農家を訪問したことから、村産いちごに興味を持ち情報収集を進めたところ、観光農園でのいちご狩り体験イベントの企画が考案されましたが、交渉先からは「連日たくさんの来客があり繁忙期のため受け入れは難しい」と断られてしまい、学生はその後方向性を変え、別の企画を行うこととなりました。

村では、観光農園の存在を知っていたものの、その実情について知る機会はこれまで無く、学生が企画提案を行ったことでその潜在需要を知ることができ、交渉先も受け入れはできなかったものの、観光農園を活用した提案には興味があり今後の参考になるとのお話もいただきました。

「田舎館お米ツアー」企画の実施では、田舎館村総合案内所「遊稲の館」で「田園」未来を築く会が調理し提供している古代米おはぎを、ツアー参加者が実際に調理する「体験型メニュー」として活用した時には、初めて見た紫色の古代米を楽しそうに調理する参加者の姿に、受け入れを行った「田園」未来を築く会の会員からは「普段、日常の業務として行っている調理作業が、お客様に喜んでもらえる体験になるとは思いもしなかった」との声があり、新しい可能性を見出すことができました。また、農家民泊に係わる提案に向けて学生が情報を収集したところ、村内で実際に農家民泊を行う方との接点生まれ、学生は実際に農家民泊を体験しましたが、私たちも農家民泊が村でどのように行われているのか現場を見てお話を聞くことができました。農家民泊については関係法令の緩和から全国的に活発化しており、田んぼアートという観光資源に合わせて村を訪れた方々が、より

多く滞在していただけるような環境づくりを村として検討している現状もあり、貴重な機会でした。

学生が実施した企画は、各種メディアや村の広報紙、村地域おこし協力隊のSNSなどで紹介されましたが、実施企画以外にも、地域の伝統行事やスポーツ大会、ねぶた制作現場の訪問などで住民と交流をしており、接した住民からは、「初めて見る光景や疑問に思ったことなど、学生から質問されたことがとても珍しく、新鮮に感じた」と話した方がいました。地域の活性化は村を訪れる人と地域住民との交流を図ることが効果的ではないかという学生からの提案のとおり、今後もインターンシップ生が村を訪れ、地域住民と交流を続けていくことで、学生だけではなく、村も住民も自分たちが住んでいる地域の特色の再認識に繋がるのではないかと期待しています。